

# 播磨国矢野荘海老名氏考

――鎌倉時代を中心に――

小川 弘 和

## はじめに

「東寺百合文書」に恵まれた播磨国矢野荘は、鎌倉後期以後の在地構造をめぐる諸問題について論じる際の主要な舞台とされている。そしてこれまでは、南北朝期における寺田法念排除による「悪党」問題解決の後に代官直務支配が成立し、それと百姓結合との対立関係が在地構造を規定する主要因になっていくと捉えられてきた<sup>①</sup>。しかし旧稿で指摘した如く、かかる理解には再考を要する。

そこで本稿ではまず「海老名文書」の現況に関する基礎的検討より浮かび上がる、室町期に到るまでの所職継承状況を俯瞰した後にそれを踏まえつつ、紙幅の制約から今回は鎌倉後期における「悪党」活動直前までに時期を限定して、その動向と位置について明らかにしていきたい。

## 一 文書伝来過程にみる所職継承

### 1 那波浦地頭職関係文書群

「海老名嫡流文書」はその内容より $\alpha$ 那波浦地頭職関係文書群と、 $\beta$ 別名下司職関係文書群とに大別される。 $\alpha$ についてはこの家系こそが播磨海老名一族のなかでも嫡流であったと思われる<sup>③</sup>。

ここで現「海老名文書」群には現れぬ、知定以前の例名地頭職継承状況について「東寺文書」より確認しておこう。現存史料上の明確な初見は寛元二（一二四四）年の季景で、続いて登場するのが泰季である。

### 2 別名下司職関係文書群

$\beta$ のうち康永二（一二三三）年の年記を有する「海老名景知紛失状」は、建武三（一二三六）年新田義貞軍の攻撃により「那波浦大嶋城」近隣の「景知宿所」とともに焼失した別名下司職関係文書群に対する紛失安堵を、当該文書群の案文を副えて求めたものである。しかしこの文書については康永二年に仮託して作成された可能性が指摘されている<sup>⑤</sup>。

まず、別名下司職をめぐる海老名季茂と領家方雑掌との相論を示す弘安五（一二八二）年「関東下知状」より検討しよう。ここでは雑掌方が、季茂が権利文書として提示した文治二（一一八六）年「頼朝袖判下文」を「謀書」と主張しているが、正和四（一二三五）年に別名領家が「悪党」の侵攻を「得謀書人季茂語」て実行されたと糾弾している事実はその主張と符合する<sup>⑥</sup>。

ところがこの文書群は現在、本来下司職を継承した家系とは異なる「海老名嫡流」の文書として伝わっている。しかも応永十（一四〇三）年の嫡流家による山堺相論において、 $\alpha$ の文永元年讓状とともに、 $\beta$ に含まれる正中元年讓状が引用

されていることからみて、嫡流家によるβ入手がこれ以前に完了していたことは明白である。<sup>(7)</sup>

## 二 鎌倉期の海老名氏と矢野荘

『吾妻鏡』同年六月九日条に同日到来として収められる、同年四月朝廷に対し幕府が具申した「政道事」に対する返書によれば朝廷より、播磨国守護梶原景時に率いられた幕府勢の軍事行動を原因とする諸荘園押領停止が求められている。海老名氏と播磨国・矢野荘との関係が、このとき生じたものであることは疑いない。問題は、その関係がこの後如何なるかたちで現れていくことになるかであるが、この点について例名・那波浦地頭職を承久新補とする網野氏の理解に従った『相生市史』では、ここでの行動は正式な権限には結びつくものではなかったと解している。<sup>(9)</sup>

薩摩国田文事、前々雖令注進、不子細歟、神社仏寺国衙庄園関東御領等、且注分地頭・御家人、且又尋明領主之交名、来十月中、可令注申之状、依仰執達如件、

弘安八年二月廿日

左馬権頭 在御判

陸奥守 同

島津下野前司跡

確かに能季は奥州合戦では鎌倉より出陣し、<sup>(10)</sup>また建久元（二一九〇）年の頼朝上洛に供奉するなど、一貫して東国御家人として行動していた様がみてとれ、播磨に本拠を移した形跡はない。また「例名地頭」の存在も、現存史料上では承久年間を初見としており、<sup>(12)</sup>後に述べる如く承久新補地頭職とみて間違いない。

## むすびにかえて

最後に上述の結果を踏まえ、引き続き継起する矢野莊「悪党」について展望しておこう。この問題については研究史上「寺田悪党」と称されてきた如く、寺田法念を中心として、山陽道沿いに展開する近隣地頭御家人等および、金融に深く関与する山僧等を巻き込んで、瀬戸内水運と山陽道との結節点たる、那波の港と市場を掌握すべく、発生したものと捉えられている<sup>13</sup>。しかし本稿で述べた如く那波浦はその成立当初より地頭海老名氏によって強固に掌握されており、海老名氏自身をも構成員に含む「悪党」の軍事行動が、那波浦掌握を目的としたとは考え難い。

註

- (1) かかる理解は伊藤俊一「中世後期における『莊家』と地域権力」(『日本史研究』三六八、一九九三年)において総合・整理されている。
- (2) 拙稿「南北朝期矢野莊田所職考―田所寺田淨信・田所代秀恵を中心に―」(『日本史研究』四四九、二〇〇〇年)。
- (3) 『相生市史』校訂者熱田公氏は例名地頭職に関わる文書を含まぬことなどを以て庶流の文書とみたが、それには従えない。
- (4) 「例名文書目録」(七一四五)に「預所祐賢<sup>与</sup>□<sup>参</sup>景相論所務条々事関東御下知寛元二年七月五日」とある。
- (5) 『相生市史』第五巻の同文書解説(熱田公氏執筆)。
- (6) 正和四年十一月日「南禅寺領別名雜掌覚真申状案」(七一五三一)。
- (7) その契機として景知による権利獲得工作が浮かび上がってくるが、この問題については南北朝期を扱う別稿に委ねたい。
- (8) 佐藤進一「増訂鎌倉幕府守護制度の研究」(一九七一年、東京大学出版会)。
- (9) 第一巻第四章「中世相生の展開」第一節「鎌倉時代の矢野莊」(馬田綾子氏執筆)。
- (10) 『吾妻鏡』文治五年六月廿五日条。
- (11) 『吾妻鏡』建久元年十一月七日条。
- (12) 「例名文書目録」(七一三二)に「承久田畠官物事地頭連署状」とある。

(13) 佐藤和彦「惣荘一揆の基盤と展開」(『莊園の世界』、一九七三年、東京大学出版会)。佐藤氏の見解は『南北朝内乱史論』(一九七九年、東京大学出版会)に詳しいが、その成果はこの論考において簡潔にまとめられている。また、櫻井前掲論考でも佐藤氏の見解が踏襲されており、この理解が現在に到るまで通説的位置にあると評価し得る。